

第2回 滋賀県社会教育委員会議における会議概要

期日：平成21年3月23日（月）

場所：大津合同庁舎7A会議室

1 開 会

○県教育委員会生涯学習課長挨拶

2 議 事

(1) 平成21年度社会教育関係団体・機関等の補助金交付について

(2) 社会教育委員会議の今期の審議内容について

(3) その他

3 閉 会

県教育委員会生涯学習課長挨拶

皆様、こんにちは。滋賀県社会教育委員会議の今期第2回目の全体会議の開催にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。

委員の皆様方には、年度末でもあり、公私とも何かとご多用のところを、本日の会議にご出席いただきまして、厚くお礼申し上げます。

また、平素、皆様方には本県の生涯学習の振興、社会教育の推進につきまして、格別のご支援とご指導を賜り、あらためて深く感謝を申し上げます。

さて、社会の急激な変化に伴って、住民同士の連帯意識が希薄化するなど、地域全体で子どもを支える教育力が低下していると言われています。

このため、公民館や図書館をはじめとした各種の社会教育施設での様々な活動、地域の大人から経験や知恵を学ぶ活動、家族のきずなを深める体験活動、地域におけるボランティア活動などといった、地域住民が主体的に地域社会の形成に参画し、地域課題に取り組む活動を通して、地域教育力の再生を図ることが、一層重要な課題となってきています。

本年度7月30日に開催いただきました第1回の全体会では、この喫緊の課題となっています「住民同士が学び合い住民相互が支え合う地域のきずなづくり」を今期のテーマとして取り上げ、審議をいただくことになり、専門委員会を組織してワーキングを進めていくことが確認されたところでございます。

織田代表、今居副代表、宇野委員、藤森委員、千歳委員、山口委員、三原委員、多田委員の8名からなる専門委員会にて、これまでに11月27日、12月18日、2月10日の合計3回の会議を開催したところでございます。

後ほど、織田代表から、詳細にわたってのご提案をいただくこととなりますが、専門委員会の皆様のワーキングの中から、5つの視点から審議を進めていけばどうかという方向性が示されました。



その5つの視点は、①学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造、②まちづくり型社会教育施設の育成、③地域のきずなづくりのためのコーディネートシステムやコーディネーターの配置と養成システムの構築、④「産・公・民・学・際・連携型」まちづくりの推進、⑤社会性をキーワードとして、人生のどの場面においても、豊かな人間関係を形成するための施策のあり方です。

本日の会議では、このご提案に対し、委員それぞれのお立場から、貴重なご意見をいただくこととなりますが、忌憚のない意見交換を図っていただきますようお願いを申し上げます。

なお、また本日の会議では、この審議テーマに関する議論の前に、一つ目の議題として、社会教育関係団体や機関等への補助金の交付についてご意見をお聞かせいただくこととしております。

既に皆様ご承知のとおり、本県の財政事情につきましては、平成21年度で約460億円、平成22年度で約450億円の財政不足が生じる見込みで、まさに「非常事態」ともいふべき危機的な状況にある中での補助金の交付額ですが、社会教育法第13条「社会教育関係団体に対し補助金を交付しようとする場合は、あらかじめ、教育委員会が社会教育委員の会議の意見を聴いて行わなければならない。」に則り、お時間をとらせていただきたいと思いますので、併せてよろしくお願ひします。

以上、簡単ではございますが、限られた時間の中ではございますが、実りある全体会にしていただきますようお願いしまして、開催にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうか皆様よろしくお願ひします。

議事の概要

【代表】

それでは、議事に入ります。まずは平成21年度の社会教育関係団体・機関等の補助金について事務局から説明をお願いします。

【事務局】

平成21年度社会教育関係団体・機関等への補助金について、資料1をもとに説明しました。

【代表】

ありがとうございました。ただ今の説明について、ご質問やご意見はございませんか。

【委員】

補助率が定額となっていることと、この補助金を交付する仕組みについて、教えてください。

【事務局】

補助金を含む予算につきましては、ただ今、県議会に上程中でして、先程のご挨拶の中でも申し上げましたように、県の財政事情が厳しいということから、財政構造改革プログラムを平成19年度からつくってございまして、平成20年度～22年度の3カ年で段階的に補助金を見直して予定にしております。

また、定額であるか定率であるかに関してのご質問ですが、生涯学習課が所管している社会教育団体への補助については、全て定額の事業費補助となっております。子ども・青少年局に関しては比較的新しい事業について、事業に対する補助率を設けて補助をしているところでございます。

【委員】

組織・団体には、それぞれの役割がありますが、今後は事業評価をふまえた補助金のあり方について検討していく必要があるのではないかと思います。それぞれの組織が今の社会にどう位置づいたものとなっているかを評価し、そのあり方をともに改善していくような検討を進めていく必要があるのではないのでしょうか。評価の仕方をどのようにしているのかという質問ではありませんが、今後、そういった視点も必要ではないのでしょうかという意味から、意見を述べさせていただきました。



【事務局】

財政改革プログラムの策定にあたっては、社会教育団体の果たす役割、自己収入や会員数などの状況、事業規模に基づいた応分の負担といった3つの観点を考慮し見直しをおこなったところです。

そのような意味からも、今いただいたご意見は非常に重要なご指摘であると受け止めております。

【委員】

私は、県公民館連絡協議会と県社会教育委員連絡協議会の立場ですが、財政事情が非常に厳しいという先程の話を受け、補助金が厳しい中でも、生涯学習・社会教育の推進のために、今後、どう乗り越えていくのかという内容を協議する検討委員会を組織して話し合っているところであることを紹介しておきます。

【代表】

それでは、ここからは次の議事であります今期の審議テーマに関する議論に入りたいと思います。

3回に及ぶ専門委員会のこれまでの審議の経過については、資料2にあるとおりで、その中から見てきた内容として、資料3の5つの視点を説明させていただきたいと思います。この内容については既に委員の皆さんにお配りして、ご意見をお寄せいただいたところですが、私からご説明をさせていただきます。

【代表】

これまでに出版されている答申や提言、今期の専門委員会等での討議の内容から、次の5つの視点に関して、より具体的な施策の研究が必要と思われます。

(1) 学校を拠点とした地域連携と新たな学校運営の創造

まず、第一点は、小学校がポイントであると思います。この前に訪問した岩根小学校はすごいと思いました。そういう意味では、滋賀県すべての小学校があんなふうになるための課題について、整理してみました。

○今期の検討では「地域＝小学校区」と捉えて議論を進めてはどうでしょうか。

そのためにも、伝統性、歴史性、文化性、シンボル性、人口やエリアとしてのまとまりやすさ、「顔」が見える 社会、絆の結びやすさ等を考慮し、スタンスを明確にした上で議論に入りたいと思います。

○「岩根小学校型」の学校づくりは、果たして一般化し得るのかどうかの議論が必要です。

またそのためには、地域や企業・NPO等との連携、学社連携、学校経営マネジメント、校長のリーダーシップ、コーディネート力、事業プロデュース力等が課題になっているのかについても

議論が必要です。

(2)まちづくり型社会教育施設の育成

社会教育施設が、「まちづくり型の社会教育施設」へと脱皮していく、転換を図っていくという発想が求められているように思います。

図書館、公民館、博物館等をいかに「地域のきずなづくりセンター」として、「地域課題解決型まちづくり」の拠点にしていくのかということです。そして、そのためには、どのようなことが課題になっているのかについても議論が必要です。

(3)コーディネートシステム、コーディネーターの配置と養成システムの構築

今一番課題だと感じているのがコーディネーターの課題です。京都市では、「地域公共人材」を認定する組織を立ち上げています。学問の流れも我々の生活文化もそうですが個々バラバラに切ってきて専門化し、高度化してきているように感じています。それらを上からの圧力ではなく、自分たちが自ら寄って行って、集まっていく、再統合化するという動きが出始めていると思います。

その個々バラバラのものを、いかに調整しつつ、新たな価値ある事象を生み出していくのか、現行のコーディネートシステム、コーディネーターの配置、コーディネート能力の到達点や問題点は何か、今後、どこまで何ができそうなのか、といったことについて議論が必要だと思います。

またコーディネートする内容に関しては、次の3つがあると思います。事業のコーディネート、組織のコーディネート、地域づくりのコーディネートの3つです。それらを社会的にどう定着させていくのか、それが担える人をどう育てていくのか、それらをやる人をどう評価していくのかという仕組みが気になっているところです。

(4)「産公民学際連携型」まちづくりの推進

学校や社会教育施設側からのみ見ていたのでは不十分で、地域全体で様々な主体がコラボレーションし、パートナーシップ関係を築く地域づくりが必要であると思います。

つまり、「学校発」や「公民館発」という視点のみで見るのではなく、地域のありとあらゆる主体を全部フラットに舞台に上げて、そこで「踊らせる」という考え方で「産公民学際連携型のまちづくり」を進めてはどうかと考えています。産業経済界<産>、行政<公>、市民・団体・NPO等<民>、幼稚園小学校から大学の教育研究機関<学>、地域外の主体<際>による「産公民学際連携協働型」のまちづくりといった提案です。

(5)人生のどの場面においても豊かな人間関係を形成

滋賀県に縁あって、ここで生きていく訳ですから、人生そのものを時間軸で表わし「豊かな人間関係」をベースにして、いかに幸せに生きていけるかというシステムづくりのようなことでまとめられないかと考えています。これは、生涯学習の本質にも関わる問題だと思うのですが、そういった内容でも話し合っていけないかと思っています。いくらこういったことを叫んでいても、できる人・やる人は限られていて、140万人の滋賀県民が、地域で生涯にわたって、豊かなきずなを持って幸せに生きていく滋賀県にするためには、どうすればいいのかを考えないといけないと思うのです。

具体的には、

- 時間軸、即ち「ゆりかごから墓場まで」、豊かな人間関係を持って人生が送れるような社会づくりをめざす必要があるのではないかと。そのための仕掛けづくりをどうするのか。
- 乳幼児期から小学校低学年期においては、保育園、幼稚園といった場のみならず、市民ボラン

ティアやNPO等による多様な「親子の溜まり場（居場所）」づくりをいかに広げるのか。

○小学校高学年から中学校期には、課外活動や地域の多様なスポーツ・文化活動、ボランティア活動への参加を促すと共に、子どもが抱える問題に対応した課題解決型の活動を、団塊世代を中心に主体的に実施できないのか。

○高校期以上では、できるだけ地域のまちづくりや企業、NPO等の活動現場に体験参加し、生きた社会を学ぶと同時に、様々な人間とのコミュニケーションが図れる能力を養えないか。また、そのための具体策は何か。

○大学生は、責任ある大人として扱い、地域づくりの担い手として評価し、いかに活躍の場を拡大していくか。

といった内容について、議論が必要なように感じています。

このような5つの内容について、提案をさせていただいた訳ですが、委員の皆様方からのご意見をお出しいただけますか。

【委員】

5つの視点については全面的に賛成です。ただ、これをどう実現していくかという点でポイントになるのは、コーディネーター、つまり地域人材の育成が大切だと思います。と言いますのは日本は今、地域重視の時代に入っていると思います。地域の連携は欠かせない内容ですが、その実現の要となるのはコーディネーターであると思うのです。そのコーディネーターを探して行って育成をするのではなく、3～4年間は地域ならしであると捉え、10～20年後を考えて話し合うことが大切ではないかと思います。その意味から、担い手となるのは今の大学生であると思います。

その大学生に地域の教育に関わらせ、ボランティア活動に携わって実践させることが必要であると思います。ボランティアの育成、コーディネーターの人材に関係させ、自発的に取り組んだ内容を全国に発信していくことが大切ではないかと思います。

【代表】

専門委員会でお邪魔しました岩根小学校でも大学生が学校支援ボランティアとして関わっておられましたね。

【委員】

曜日によって入ってくれる人数は違いますが、現在、私の学校では4名関わってもらっています。子ども達との関係もいい関係で進められています。

【代表】

中学校ではどうですか。

【委員】

私の学校でも、バスケットボールの部活動の関係で大学生が自主的に来てくれたり、草津市との連携で滋賀大学の学生さんがボランティアとして来てくれたりということが次第に増えてきていると思います。現場としてはそういったシステムが増えてくれればありがたいと思います。

【代表】

滋賀県も大学が増えましたし全部という訳にはいきませんが、学生も現場に入れ込むというのも考えられればいいのではないかと思いました。

【委員】

コーディネーターという言葉ばかりが先行してしまって、コーディネーターって何なの？コーデ

ィネートするってどうすること？という中身が共通理解できないままになっているのではないかと思います。

コーディネーターというのは5つの機能を持っていて、その中核にあるのは「つなぐ」という機能ですが、その周りには枝葉があって、「伝えること」、「育てること」、「支えること」、「調べること」があると思うのです。それらができて中心にある「つなぐ」ということができると思います。

既存のものをつなぐことは誰にでもできることであって、何も無い時にはつくる必要があると思います。コーディネーターというのは、ある物とある物をつなぐだけでは決してないと思います。

このようなコーディネーターのあり方についても、考えていかなければならないと思いました。

【代表】

このメンバーの中に、唯一、コーディネーターという肩書きで動いておられる委員がおられますので、ご発言をお願いします。

【委員】

「しが文化芸術学習支援センター」の取組は、10年前より取り組んでいまして、本年度は県の補助金をいただいていた初年度となっていて、以前よりシステム化されてきていると思います。あくまでもシステムが先ではなく実践からニーズに応える形でシステムができあがってきたように思います。先程からコーディネーターの議論がありましたが、今、このセンターで登録している大学生のボランティアは70名いまして、大人も入れると100名を超えるボランティアがいます。私は、その100名のボランティアさん全員の顔を覚えるのと参加いただいた日のお世話や調整を行っています。その中から次なるコーディネーターを育てようとして取り組んでいます。

これは文化庁のプロジェクトで、文化ボランティアコーディネーターを育成しようとする事業に対して助成金が出ていて、滋賀県がモデルになってほしいということから始まったものです。

コーディネーターは他人から認知され、「コーディネーター」と呼ばれて、初めてコーディネーターになれるのだと思います。現実には、私はコーディネーターになるには10年間かかりました。システムをつくることから入るとおかしなことにならないかと思います。

また、大学生のボランティア活動に単位をつけると、いろんな大学生が現場に入ってくるのが懸念され、あまりそういう学生に入ってもらいたくないという思いもあります。

私は、今年、学校支援の活動として117回、学校に入りました。117通りのコーディネートをさせていただいたのですが、地域によっても子どもによっても様々な状況があり、子どもを中心に据え、学校側の教育効果にどう寄り添えるかという点に配慮したコーディネートをしていく必要があると考えています。決してコーディネーター自身が主人公になってはいけないと思います。

【委員】

私の学校は学校支援地域本部事業に取り組んでいて、地域コーディネーターが配置されています。コーディネーターのあるべき姿についてのご意見を聞かせていただいて、コーディネーター自身も豊かな人間関係の形成と関連づけて、その生き方について考えてみる必要があると思います。私はずっと自分自身がコーディネーターにならなければいけないと思い取り組んできましたし、それを次のコーディネーターさんにつなげていきたいと思っています。そして、そのコーディネーターをどう育てていこうかということが課題となっています。

豊かな人間とは一体どういうことなのか、人間のしなやかさやリスクマネジメントとはどういうことなのかについてご意見をお聞きしたいと思います。

【委員】

私は、ボランティアという言葉はある意味では非常にくせ者だと思っています。私の活動分野としては子育て支援の中で、親やシニアの世代と関わっています。その取組の一つに朝の読み聞かせがありますが、ボランティアの中には「ボランティアなんて簡単にできるよ」という人がいます。いろいろな所で様々な講座で学びの場はつくってはいますが、一度学べば自分はオールマイティと考えられたら怖いと感じています。また、一方で非常に熱心な方もおられます。

そのようなボランティアさんとの関わりの中で、私は、ボランティアは一面的に自己犠牲が必要なことだと思っています。ボランティア活動をするには愛が必要であるということに尽きると思います。人と人とのつながりを通して、愛を伝えることが大事であると思います。

【委員】

委員の皆さんが、それぞれの現場で関わっておられるお話が聞けるので非常に参考になります。

では、どうやって皆さんが志すような人材をつくっていくのか、そのとっかかりをどうしていくのかとなると、世の中、そんなにレベルの高い人ばかりがいるわけではないと思いますし、フレンドリーな人ばかりではありません。どのような仕組みを作って、特に若い人材に入ってきてもらうのかという議論を今後する必要があると思います。

そして、それは、大学頼みだけではなく、例えば、産業界の中にも素養をもった人間がたくさんいると思うのです。そういったことも含めて議論してはどうかと思います。これは仕事の加減で、24時間子どものために尽くすことはできないと思うのですが、それぞれのパートパートで子どもに関わることが可能だと思うのです。また、例えば、多くの時間を割ける方と多くの時間は割けないけれども志を持つ方がうまく連携できるような仕組みについて、具体的に議論してはどうかと思います。さらに、現段階の卒業生である団塊の世代の方々にも関わってもらわないといけないと思いますが、次の世代のことも考えて、それぞれの役割を分担して関わる大切であると思います。

【代表】

具体的に議論してみたいシステムというのは、狭い意味ではなく、広く立体的に考えていくことにしたいと思っています。画面を広く開けてしかも時間軸でつながっていくというシステムができないかなと考えています。細かい堅いシステムではいけないと思っています。

そういった意味で、先程、議論のあった学生のボランティアに関しても、単位が出るからというのも、けしからんといえればけしからんことですが、単位を目的にしても学生自身が変わることもあることから、必要なことではないかとも思います。大学の現場にいますと、鍛えるさじ加減が難しい時代になってきていまして、人間教育をどうするかまで考えると根本になりますが、そういった意味では、3の視点と5の視点とはつながっているとも考えられます。

【委員】

心の豊かさということがよく言われますが、それは、自分の心を豊かにすることだと思っている人がほとんどではないかと思います。自分の心はわからないものです。私は、人の喜びを見て自分の心が豊かになるのではないかと思います。つまり、ボランティアの根源は自分の外にあると思うのです。他人のために役立つならやってもかまわないというところに、自分の心を豊かにする根源があると思うのです。そこを地域ぐるみで何とかしようとするのであれば、先生をみんなで後押しし、応援しようとするコンセンサスをつくるのが大事であると思います。そういったことから

親を教育することが大切であると思います。

【委員】

今、委員が言われたように、人を育てる原点は親だと思います。「近頃の親は、近頃の親は」とよく言われますが親も千差万別で、その親を育ててきたのは、その前の世代の親であり、次の世代を育てることとして、子どもを育てていくことが大事だと思っています。また、組織の代表として人を育てるという意味から、次に交代する組織の長も育てていかなければならないと思います。



先程から議論のあったコーディネーターを育てるという点では、素養をもった人を育てるのに、種を撒く作業も必要なことだと思います。自分を変えていく、広めていく、深めていくために常に学んでいくことがないと変わっていかないと。それを変えていけるだけの自覚をもった人が多く育ってこないと社会は変わらないと思います。

【代表】

学ぶのは子ども達であって、大人は学ばなくても構わないと考えるのではなく、人間は死ぬまで学んでいかなければいけないものであって、この体得が先程の人間のしなやかさにつながっていくのではないかと思います。ただ、個人差がありなかなかそうはいかないもので、能力はあってもうまくできないことが多くあるのが現実ではないかと思うのです。

このこととも絡めて、「しが文化芸術学習支援センター」での取組について、補足説明をいただけますか。

【委員】

これまでの話の中にあつた親の位置づけとしては、この取組ではボランティアとなっています。

コーディネーターのつながりとしては環境やスポーツなどの分野別でコーディネートしているのですが、そのそれぞれが、なかなか横につながっていかないのが現状ではないかと思っています。それが大きな渦になるかどうかは今後のポイントになると思います。そのためにも、素敵なキャッチコピーづくりやマスコミによる発信が、今後、必要になってくると思いますし、行政だけではなく、民間団体やいろいろな人達が楽しく渦を巻いていくようなことになってくればとよいと思っています。

【代表】

なるほど、わかりやすい言葉で発信していくということが大事だということですね。

【委員】

現在勤務している大学ができて6年目になります。4年目くらいからやっと学生が大学から地域に出て行けるようになりました。例えば、地元の自治会の運動会にボランティアで行ったり、中学校の体育祭の準備から指導から全部一緒になって取り組むようなボランティアもやっています。単位認定については来年度から始まるのですが、単位をつけてあげることによって、よりボランティアに関われる窓口や受け皿をつくってやれるということでは、単位化はいいのではないかなと思います。また、今の学生は「ボランティアにでも行ってこい」と言わない限り、ボランティアの良さや教室では得られないものが得られないのではないかと思います。

先程の発言の中でキーワードということを言われましたが、まさにその通りで、コーディネートする人にとっては、自分の専門領域のキーワードの中でコーディネートしていかなければならないと思うのです。私も専門領域に関して地域から呼んでもらい、初めてそこでネットワークができてきたと思います。だから自分の専門領域のキーワードのところから、リーダーを育てることが始まるのであって、いきなりコーディネーター養成というのは無理ではないかと思います。ただ、それには、例えば、夏休みの期間のズレといった期間の問題もあります。そのようなこともわかっている人がコーディネーターをしていかないといけないと思います。

それから、スポーツに関しては、総合型スポーツクラブがあります。スポーツに関して、結構、県内には幼児から高齢者まで楽しく集える場ができてきています。クラブに人を巻き込んでいこうという動きもあり、コーディネーターになる素養のある人はいると思います。

そのためにも、県として、市町教育委員会や体育協会のネットワークづくりに取り組んでもらうことが必要ではないかと思います。

最後に、私は若狭湾でのボランティア養成に関わっていますが、そこでは受講生に何かを教わりたいという気持ちを大切にしないといけないと言っています。また、コーディネーターに関してはコアリーダー育成のワークショップに取り組んだ際に、出された意見として、いかに地元の中心になっている自治会長や校長先生のOBとネットワークをつくることが重要であるという意見が出ていたことを紹介しておきます。

【委員】

産業界でも地域に貢献している方もおられますが、なかなか表だって目立ってやっておられる方とそうでない方があって、見えてこないところがあります。実際に従業員の中にも柔道をやっていた人で地域で関わっているものもあり、自分の趣味と実益を兼ねて地域で活躍していることもあります。体験活動の中で地域と学校とがうまくつないでいるところもあり、今後はそういったところも引っ張り上げていきたいと思います。

【委員】

働く者の立場で考えると各地域やNPOとの連携が希薄になってきているように思います。ここでも出された意見を広めていきたいという思いで聞かせてもらっていました。

特に、労働界から申しあげますとリーダーを養成し確立していくというのが大きな課題となっています。その手法として、見て、聞いて、知って、行動するという4つが、しっかりとマッチングできれば、それなりの人材を養成できると思っております。ただ、今のこの厳しい労働環境の中で、何らかの手だては打てないだろうかとチェックを入れるのですが、なかなか行動するところまでは至らないというのが現実です。

それともう一つは、企画力なり指導力なりという部分をどう発掘していくかということが課題になってきていると思います。なかなか地域貢献ができない中、60歳で退職になってきたときに地域に戻れば大きな仕事がどんとくるという流れになってきているのが実状です。今、生活面でもワークライフバランスが求められており、ようやく国も県も含めて議論になっていると思うのですが、実現するまでには、数年かかると思いますが、変化は確実に来ていると思っております。

今回の5つの視点の中で、5番目の人間関係の部分と現実の社会風潮との部分をどうマッチングさせながら、1～4の課題をクリアしていくかということが課題ではないかと感じました。

【委員】

今日もお話を聞かせていただいている、素晴らしい取組がたくさんあるんだなと感じました。

事前の意向調査でも書かせていただいたことですが、私は地域の一員としてお願いしたいことはプロのコーディネーターが必要だということです。

先程からの話を聞かせていただいても、横のつながりは大事だと思いました。素晴らしい実践が県内にあることを知りましたが、地域の者にとっては、やりたい人にとってのきっかけがないのが実状です。そのきっかけづくりをプロのコーディネーターさんと行政が何かをしてくださるといいと思いました。

大学生のボランティア活動に関わってですが、大学生の息子も単位の取得と絡んで、学生ボランティア活動に取り組んだことがありましたが、帰宅後一番、「よかった」と言って帰宅しました。尻込みをするけれども、少し好きなことから一歩手を出して進めてみるという働きかけが大事ではないかと思います。地域に眠っている人材をピックアップして、きっかけを与えるという仕掛けが必要だなと思いました。

【委員】

「ただほど安いものはない」とよく言われますが、ボランティアということを考えると、ただではなく、命を賭けてやるべきものなんだ、地域の教育力のためにお金を払ってでも将来の人間を育てるために取り組むんだというコーディネーターの役割が取り入れられると、全国に発信できるすごい提言になるのではないかと思います。

【委員】

私は家庭教育の分野から出させていただいているので、5番目の視点に関わって、活動内容を紹介させていただきたいと思います。私共のNPOでは、0歳～100歳まで、年をとっても大切にされるようにしたいとの思いから、「子どものために、親のために、地域と社会のために」の3つの分野から活動をしています。

ここに来るまでにも1時間30分程、親からの相談を受けてきましたが、親を育てる活動にも力を入れています。なかなか親に声をかけても聞きに来てほしい親が来ないということがありますが聞きに来てくれた親達が聞きに来ない親達を支えるのだという考え方で、コアを養成することが大事ではないかと思っています。

先程、学校の先生方を地域で後押しすることが大事であるとの発言がありましたが、そのとおりだと思います。今、学校の先生方は親の対応に時間を割いています。親からのクレーム対応で時間を費やすことが多いと聞きました。今、外国の方でも言われていることですが、大人になってから言っても変わらないということで、小さな頃からの親子関係をしっかりとつくるのが大切であると思いました。

【委員】

今日は大変いろんなことを聞かせてもらいまして、勉強になりましたありがとうございます。

女性会はもともとボランティア団体として、「ごった煮」という言われ方をよくするんですが、いろんな活動をしています。子ども会や老人会とも関わっているような活動をしていく大事な団体ではないかと思います。衰退してきている地域もありますが、県内で5,000人～6,000人の会員を有していますし、直接、県とはつながっていないけれども、自治会のレベルで多くの活動が展開されています。防火の取組やお祭りごと、女性の意見を聞くために女性会に声がかかることが多くあります。

そのようなボランティア団体としての役割と自分を高めるための学習をする大切な場だとも思いますし、この他にも情報交換も大切にしています。

阪神大震災の時にも言われたことですが、大きな災害の被害にあった際にも本当に助けに来るのは、レスキュー隊ではなくて、近所に住む人だったとのことでした。この大切なことをつなげていく一つが女性会が握っているのではないかと思います。そういった根の張った活動を続けていくことが大切ではないかと思いますし、それをつなげていくことの鍵を握るのが女性会ではないかと思えます。そのようなことから、地域づくりに女性会が関わっていくことが大切であるとあらためて思いました。

また、女性会に入っているだけでいつの間にかボランティアをしているということもあります。先程、出された意見とも関わりますが、もともとの社会教育関係団体の活動を見直し、それを横につなげていくという発想が大事だなと思いました。そして、それをつなげていくことがコーディネーターであると思えます。

【委員】

中学校の現場では、小学校を卒業したらほっとされて、PTAや地域になかなか関わらない人も出てきています。そのような中で私自身が感じているのは、生涯学習の学ぶ楽しさ、活かす喜びのイメージについてです。楽しく学んでいる人は多いのですが、もう一步、社会貢献というところへ踏み込めていない人がいるのではないかと思います。公民館のサークルをしている人が、もう少しいろいろな活動に関わってきてほしいと感じています。学んでいることをお裾分けすることが当たり前ですよというメッセージをもっともっとみんなが共有できるといいのではないかと思います。

子どもも親も二極化が進んでいるように思います。いい風土をつくるために、システム化をするために、みんながこのお裾分けをすることの大切さを声高に言うことが必要ではないかと思います。そういったシステムがあれば、学校としてはありがたいというのが本音です。

【委員】

ボランティアという構えをつくってしまうと、本当にしんどい思いの人がよって来れないということになってしまう気がします。ある子どもの作文で、「うちのおばあちゃんは何も取り得がないから参加できない」という声がありました。確かに、学校では寂しいし苦しいから嘔みついて来られる保護者がいます。そこで、私の学校では、そういった方々に逆に子どもと接する場面に関わっていただいて、子どもってこんなに素晴らしいところを見ていただいたり、そのおばあちゃんに動物の世話をしていただくボランティアとして関わっていただいたりしています。

つまり、私達は、どこで学びができるのかというボランティア活動のチャンスをどこにも与えていくことが大事ではないかと思います。そして、その場面場面でボランティアがあったり、コーディネートがあたりするのがいいのではないかと思います。そのサイクルを忘れて、できる人だけが突っ走るようなシステムや組織をつくると、とんでもない内紛が起こるのではないかと思います。

【委員】

私は公民館に勤めておりまして、今のこの時期になりますと、公民館に「やれやれ、やっとなりが終わった」と言ってやって来る人がおられます。そういった方々を見てますと、公民館で活動している人が地域にお裾分けしているということをなかなか感じていただけていないのが現状ではないかと思えます。地域の絆づくりのためには、やはり自治会がしっかりしていないといけないと思えますし、いろんな人を巻き込んでいかないといけないと思えます。そういった活動を通して、人と

人をつなぐ、そして、いろんな年代をつなぐことが大事だと思います。県庁で言えば自治振興課が所管になるのではないかと思います、そことの接点を持ちながら、教育を抜きにすることなく、日々の活動が公民館やまちづくりにつながっているということを意識して取組を進めていくということが重要で、そこで学んだことを返していくことを訴えていくことが大切であると感じました。

【代表】

私は、まちづくりを30年近くやってきたのですが、私のまちづくりは徹底的に「学習型のまちづくり」でして、私のまちづくりはイコール生涯学習です。ですから学んで絶えず成長していく、そして、地域との関わりの中で相手や地域と自分とがともに喜び合うということをして30年間取り組んできたわけです。今回、そういったことから見えてきた内容を散りばめさせていただいたところでした、今回の会議録を後で専門委員会でゆっくりと解析していきたいと思います。ただ、いくつか宿題が出ましたので、応えられるようにがんばって次のステージに移ろうと思います。

一応、問題提起した内容については、皆さんの方で受け止めていただいたものと思えましたのでこれをベースにしていこうと思いました。ただ、検討した経過で5番目の視点を一番最後に置いてあるのですが、一番最初に大テーマである5番目の視点を置いて、そして最後の具体的な展開としてコーディネーターの視点を書きまとめ、その間に、1の視点の学校、2の視点の施設、そして、それらが連携するという点で4の視点という1と2と4をはめ込むという形で書いていったらどうかと思いました。そういったことでよろしいですね。

そして、今日の審議では圧倒的にコーディネーター論に関する話が多かったのですが、おそらくコーディネーターという人そのものを制度的につくるというのは狭い内容の話であって、社会全体のコーディネート力をアップさせることが大切であると感じました。このあたりも今日の会議録を見ながら整理していきたいと思いました。

委員の皆さんには、時たま、報告と宿題があるかもしれませんが、よろしくお願ひしたいと思ひます。今日のところは、ここで議事を終了したいと思ひます。

最後に3つの蛇足になりますが、私も数多くの審議会や会議に出ているのですが、必ず何らかのテーマがあり、その内容について審議することが使命なのですが、併せて、会議に参加することでどん欲にお互いに知り合い、アピールし、伝えることが楽しみになるように思うのです。まさに、ここに来ることが生涯学習だと思うのです。そして、もう一つは、滋賀県社会のこのテーマに関する縮図です。社会教育という現場がここに見えます。ですからここが活性化すれば、滋賀県の社会教育の展望が見えてくると思っていますので、これからもお付き合いをいただきますよう、よろしくお願ひします。



【事務局】

どうもありがとうございました。幅広く議論をいただきまして本当にありがとうございました。

これもちまして、平成20年度第2回の滋賀県社会教育委員の会議を終わらせていただきます。